

報告

地域住民を対象とした認知症予防ボランティア育成の 成果と今後の課題

ー認知症予防ボランティア個人の変化からー

細川淳子 天津栄子 佐藤弘美 伊藤麻美子

松平裕佳 金川克子 藤田茂美*

概 要

本研究は、地域住民を対象とした認知症予防ボランティア（以下、ボランティア）育成の成果と今後の課題を明らかにすることを目的とした。対象は、ボランティア3名であり、認知症予防ボランティアの会に参加してから自己の変化について半構面面接を実施した。結果、1）認知症を継続して学習したことによる効果として、学習内容と実際の介護現象が結びついたり、親に対する態度の変化や、自分が認知症になった場合の対応を考える機会が出来ていた。2）クラブ活動の効果としては、個人の楽しみ、新たな技能の習得、家族内役割の獲得、さらなる向上心などが示唆された。今後の課題としては、実際に認知症の方とかわることによる学習、介護者としての介護技術の習得、自分自身の認知症予防など個人に合わせたニーズへの対応と、意見や役割を強制せずにボランティアの主体性を尊重して関わっていくことが挙げられた。

キーワード 認知症、予防、地域住民、ボランティア

1. はじめに

我が国では2015年に戦後生まれの団魂の世代が65歳以上の年齢に到達し、認知症高齢者の数は250万人に達すると推計されている¹⁾。このときまでに総合的な認知症対策を進めていく必要がある。

われわれは地域で認知症予防活動の具体的な活動にかかわる人材を地域から発掘・育成し、認知症予防が必要な高齢者に対し、適切な認知症予防活動を継続・定着させていくことが重要であると考へた。そこで地域住民が認知症とその予防方法に関する学習を広め、認知症に対する偏見を克服し、相互に助け合う認知症予防のシステムを構築していくための認知症予防ボランティアの育成を開始した²⁾。本研究は、この認知症予防ボランティア育成を継続してきたことによる、認知症予防ボランティア個人の変化を明らかにし、これまでのボランティア育成の成果と今後の課題を検討することを目的として行った。

2. 研究方法

2. 1 これまでの取り組み

平成15年12月から月に1回ずつ平成17年6月の時点で合計18回の認知症予防ボランティアの会（以下、いちご会）を開いてきた。（表1参照）いちご会の会員は、地域住民を対象に行った第1回痴呆予防講演会の出席者から募った者と、会員の勧誘によって参加している者である。会員数は46名、平均年齢は約65歳（30～80歳代）である。各回では認知症予防ボランティアを育成するために次の2つを実施している。1つはテキストを用い、研究者らが認知症に関する知識を提供した後、会員と質疑応答を行う形式の学習である。もう1つは、パソコン・絵手紙・童謡の3つのクラブを立ち上げ、クラブ毎に「認知症やボランティアについて」「クラブ活動内容について」話し合いながら進めていくクラブ活動である。

2. 2 対象

研究者が各回のクラブ毎の話し合いの中で、個人の変化が特にありそうだと感じた会員を各クラブ1名ずつ計3名選出した。

*かほく市地域包括支援センター

2. 3 データ収集方法

プライバシーの確保できる個室にて半構成面接を実施し、対象の同意を得て、テープに録音した。面接内容は、「いちご会にはじめて参加した頃と比べて、自分が変化したと思うことについてお話下

さい」「認知症についての捉え方や考え方がどのように変わったか教えて下さい」などである。尚、対象が各回の内容を思い出すのを助けるために、今までの会の簡単な内容を一覧（表1）にして示した。

表1 いちご会年表

| | | いちご会の歴史 | 特記事項 | 学習会 | 歌 |
|-------|-----|---|---|--|----------------------|
| 平成15年 | 11月 | 第1回痴呆予防講演会 | (Y先生) 痴呆予防ボランティアの募集 | | |
| | 12月 | 第1回痴呆予防ボランティアの会 | 立ち上げ | | |
| 平成16年 | 2月 | 第2回痴呆予防ボランティアの会 | 会の名前が「いちご会」に決まる 「パソコン」「絵手紙と体操」「童謡」のクラブができる 学習本「やさしい痴呆性高齢者への介護とケア」を読み始める | 大学スタッフ1: 痴呆について | |
| | 3月 | 第3回いちご会 | クラブ毎の話し合いがスタート （「今の私は痴呆をこんな風に思う」「ボランティアってどんな活動?」「どんなクラブにしていこうかあ」） | 大学スタッフ2: 老年痴呆者への精神的対応の原則 1～5条 | |
| | 4月 | 第4回いちご会 | 前回話し合ったことの振り返り | 大学スタッフ3:MOMO 6～10条 | 春の小川 |
| | 5月 | 第5回いちご会 | | 大学スタッフ4:電池が切れるまで 11～15条 | おぼろ月夜 肩たたき・鯉のぼり |
| | 6月 | 第6回いちご会 | いちご会規約について① | 大学スタッフ5:ばあやのお話 16～20条 | 故郷 |
| | 7月 | 第7回いちご会 | 地域を基盤にした痴呆予防プログラムの体系化に関する研究発表 国際アルツハイマー病会議で報告することを発表 | 大学スタッフ1:自分の感受性くらい 脳血管性痴呆の高齢者への介護の原則1～3条 | 幸せなら手をたたこう たなばたさま |
| | 8月 | 第8回いちご会 | いちご会規約について②・会費について 各クラブの代表者決定 | 大学スタッフ2:一番いい人 4～7条 | あめふり 故郷 |
| | 9月 | 第9回いちご会 | 開始時間9時30分になる。大海交流センターで実施 いちご会規約について③ | 大学スタッフ4: 8～10条 | もみじ 赤とんぼ |
| | 10月 | 第10回いちご会 | 会費3000円徴収、痴呆予防後援会の役割分担 | 大学スタッフ1: これまでの振り返り | 村祭り |
| | 11月 | 第11回いちご会 | 痴呆予防講演会準備、大海交流センターで実施 国際アルツハイマー会議でいちご会の活動を紹介 ポスター・標識やチラシの絵を描く | 大学スタッフ5: 痴呆に伴う問題行動 徘徊・せん妄 | 故郷 |
| | 12月 | 第2回痴呆予防講演会 第12回いちご会 ＊ 大海交流センターで打ち上げ | ミニシンボでいちご会を紹介 痴呆予防講演会のお疲れさん会を実施 | | 故郷 |
| 平成17年 | 1月 | 第13回いちご会 | 新会員の入会。大海交流センターで実施 封筒づくり開始 | 大学スタッフ4:あなたへ 色情行為・不潔行動・夕暮れ症候群 | 四季の歌 |
| | 2月 | 第14回いちご会 | 演習コーナー(HDS-R、看護大学出版物忘れチェック) | 大学スタッフ2: | 村の鍛冶屋 |
| | 3月 | 第15回いちご会 ＊ 第1回役員会 ＊ お花見会実施(パソコン) | 会計報告、いちご会規約について④完成 | 大学スタッフ1: 日常生活の基本動作の介護 | おぼろ月夜 |
| | 4月 | 第16回いちご会 | 大人のドリル(ごんぎつね・我が輩は猫である) | 大学スタッフ5: 介護で注意を要する病的状態 | |
| | 5月 | 第17回いちご会 ＊ GH訪問(童謡) | 自己の成長記録を書く 会計と会計監査が決まる | 大学スタッフ4: 在宅介護の継続の問題 | 背比べ |
| | 6月 | 第18回いちご会 | 第3回認知症予防講演会ではO氏を呼ぶことに。 7月2日;認知症タウンミーティングに17名参加 | 大学スタッフ6: 2冊目「新しい痴呆ケア」1と2 | 夏は来ぬ シャボン玉 |

2. 4 データ収集期間

平成 17 年 6～7 月

2. 5 データ分析方法

テープを逐語録に起こし、認知症に対する考え方や日頃の行動、態度など自己の変化について語られた部分を抽出した。抽出は 3 人の研究者がそれぞれに実施し、合意が得られた部分を記載した。また、その語りの要約をおこなった。

2. 6 倫理的配慮

対象者には研究の目的や方法を書面と口頭で説明し、面接を拒否しても不利益が生じないこと、話したくないことは話さなくて良いことなどを伝え、書面にて同意を得た。尚、本論文に記載する対象者の情報は対象者に提示し、掲載の許可を得た。

3. 結果

対象の概要を表 2 に示した。対象者 3 人の語りの主要部分を表 3～5 にそれぞれ示した。

A 氏は、いちご会での学習は納得できる場所が多く、その学習により、親の何度も繰り返される昔話を、脳が働いている状態と捉えて聞けるようになったこと、親から教えられることがあると気づいたことを一番の学びにあげた。また、クラブの代表は重荷に感じながらも、会の準備や後始

末を会員も行うように役員会で提案している。また、課外活動の希望をもっており、クラブ活動の絵てがみを更に学びに行きたいという意欲も話された（表 3）。

B 氏は、現在も姑の介護をしている。いちご会での学習によって現実の介護で何が起きているのかに気づき、姑の言動は仕方がないことと違ってやさしく出来るようになったが、イライラするときもある。今後はいちご会でストレスをためない介護方法を学ぶこと、会員の介護経験を聞きたいというニーズがある。クラブはパソコンクラブに入っており、パソコンが出来るようになり、夫から頼りにされるようになったり、自分自身もパソコンをしているとイライラしなくなったと語っていた（表 4）。

C 氏は、80 代ということもあり、自分自身の認知症予防のために話を聞きに来ていることを強調していた。その話を聞いて、認知症の方の心や付き合い方がわかるようになったと話された。また、いちご会以外で話を聞いたときにも、いちご会で聞いている内容に間違いはないと思うようになった。年長者として童謡クラブの代表を務めていたが、代表としての発言が出来ず、代表を交代して楽になったことも語っていた。童謡クラブでは歌のすばらしさを再認識すると共に童謡を歌っているときの子供のような心を今後もなくさないようにしていきたいということを語られた（表 5）。

表 2 対象の概要

| | A 氏 | B 氏 | C 氏 |
|-------|----------------------------|---------------------------|---------------------------|
| 年代 | 60 歳代 | 60 歳代 | 80 歳代 |
| 性別 | 女性 | 女性 | 女性 |
| クラブ | 絵てがみ | パソコン | 童謡 |
| 参加状況 | 第 3～18 回のうち 13 回参加 | 第 6～18 回のうち 10 回参加 | 第 1～18 回のうち 14 回参加 |
| 語りの長さ | 面接時間約 70 分／ 逐語録 A4－10 枚 | 面接時間約 60 分／ 逐語録 A4－7 枚 | 面接時間約 45 分／ 逐語録 A4－6 枚 |

表 3 A 氏（60 歳代・女性・絵てがみクラブ）の代表的な語り

| | 逐語録から抜き出した自己の変化を語っている部分 | 変化の要約 |
|---|---|---|
| ① | いちご会に入って親が長生きしてくれてはがよかったけど、教えられて 65 になった私がお後を追って行っとなかなか思ったら、上手にできんけどもなんかやっぱ生んでくれた親が長生きしたおかげで自分が教えられることがいっぱいあるんかなって思っ。 | 親から教えられることがあると気づいた |
| ② | （入院中の母が）17・8 ころまで親元におって、その自分の記憶に残ったことばかりしゃべる。それを聞かれるか聞かれんかっていうと他人やったらまあよきに計らって聞いとるけど親やったらこの勉強したおかげで、ああ一生懸命今きくと昔のこと思い出して脳が動いとるんやな、働いとるんやなと、聞いてあげられる気持ち、今まで怒ったけど、話をゆっくり聞いてあげて、また、ふーんそんな人と遊んでそんな遊び方して、昔そんなことしってたん、とかって聞いてあげられることがすごくいちご会来て良かったと思う。 | 学習により、入院中の母親の話を怒らずに、脳が動いていると捉えて聞いてあげられるようになった |

| | | |
|---|--|---|
| ③ | 会の中は、やっぱりあの本に先生方順番に話かけてくれるあれが一番私はもうそれしかない、あの1コマ1コマ、今日4ページ、来月4ページ、来月5ページあの1コマ1コマ言葉にもう 5個話を聞けば4個までは納得 、納得、納得で私は今日まで聞いてきました。勉強会はまたもういっぺんも戻ってあとからおいでた人もおいでるから、1回戻って、あの～あらあらとD先生した時も、絶対にいいとあれは感じました。 | 本を用いた認知症の勉強内容に納得できた |
| ④ | お年寄り、病人、ボケた人が行動しとるかちょっと何時間でも私見たいがや、夢ねん。E県のFさんのところ小さいバス借りて、誰かに運転してってもらって。どういう0歳から死を待つまでの 生活をどういう風にしておいでるんか見学、視察、何かで行きたいなあと思う 。G先生来て頂いたがいね、あれはもうまた来て、変わった話聞かいて欲しいなあ。行かないからスライドで見るとちゅうのもいいし。 | 実際の介護現場を見学したいと思うようになった |
| ⑤ | (クラブの代表は) 役ちゅうだけでいいって最初決めたけどやっぱなんとなく 重荷になる と思う。 | クラブの代表を務めることは重荷に感じる |
| ⑥ | 私、途中から会入ってきたけど、行ったらちゃんとお茶、ちゃんとテーブルきちっとなつとるが、先生方そういう風にして迎えんならんがかなって最初思ってたけど毎回これ大変なことやなって自分で感じとったとき、あーこれで今いいなら口出すことないし、口出すことないしって時に役員会で 私(準備や後片付けを会員もしよう)言ったんや 。役員会にいろんなことやっぱりいったほうが話し合いがいいんじゃないかなって思っ。 | 準備されたところに参加するのではなく、自分達でも準備や片付けをしていくよう提言した |
| ⑦ | 私ら基礎習ってないからダメなんやと思うんや、私基礎習った人は1回習えば、あとで10回でも努力するげん。大事な仲いいお友達に頼んで 習いに行ってみようかと思たりしとるんやけど 。 | (絵てがみを) 習いに行こうと思っている |

表4 B氏(60歳代・女性・パソコンクラブ)の代表的な語り

| | 逐語録から抜き出した自己の変化を語っている部分 | 変化の要約 |
|---|---|-------------------------------|
| ① | おばあちゃん(姑)をみとったら、ああ、こんなことになってくるがやなと 。で、こんな時はどんなようなんにしていったらいいがかな、こんなようにしていかならんちゅう感じでもなかったけど、頭の中にそれ(習ったこと)が入とって、なんかあった時もそれがぽと出てんね。ああこんなにしとらいいんか、そっかこんなことになるんやねって、徐々にこんなことになってきとるんかなあって、これ (学習会の本)読んで初めて気が付いた 。 | 姑の介護で何が起きているかを学習して気づいた |
| ② | あつ、こんなこと言うtotてもだめやわ、 病気や、年や、仕方ないんやわって 思うげん。 思うんやけど、そんなのにやさしいがに言われる時と、自分がイライラとしてくる時とね 。 | 仕方がないんやと 思っやさしく出来る時がある |
| ③ | 介護の場でストレスをためない接し方を勉強したい 。人におばあちゃんの、あのその痴呆を認めてもらいたいってことでなくて、自分が常日頃どんなんにして対応したり、接したり、それを楽な気持ちでできるかちゅうことやね。 | ストレスをためない接し方を勉強したい |
| ④ | 私、H地区のほうから Iさん ておいでるやろ。あの 人としゃべってみたい なあって思うこともあるんやね。あの人は舅さんでないけど自分の親をみてきてるんやね。あの人がやったら、ちょっとは旦那さんの気兼ねもあるし、自分の親をみていく時に、お父さんに気兼ねして、 どんな世話の仕方しとったんかなあと思っ 。 | 介護経験のあるいちご会員に世話の仕方を聞きたい |
| ⑤ | 今、うちの(夫)町内会の会長しとるもんで、そしたら口でやっぱりふれて歩くってことできんげんね。そしたら前は鉛筆で、ペンで書いて、それをコピーして、回いとったんやけど、 パソコンできるんやったらそれしてくれって言われて 、それからちよつとずつ、でしとったら楽しいしね、いついっかまでにこれしといてくれって、こんながんなんかなようなが作っておいてくれって言われたらね、よし頑張っやらんああって思っね。 | パソコンが出来るようになり、夫から頼りにされるようになった |
| ⑥ | そんなんなったら(パソコンしていたら)バカなことなんか イライラと全然考えんようになって 。 | パソコンをしていたらイライラしなくなった |

表5 C氏(80歳代・女性・童謡クラブ)の代表的な語り

| | 逐語録から抜き出した自己の変化を語っている部分 | 変化の要約 |
|---|---|--|
| ① | 第1回痴呆予防講演会のお話聞いて、何か、参加する意味は、これから 自分が痴呆になったら大変だな、少しでもお話聞きたいなあ と思って参加した。自分を守るために。 | 自分が認知症にならないためにお話を聞く |
| ② | 少しずつなんか、今の 痴呆の方の、心って言うかな 、あの、一緒に話してるっていうかな、 つきあい方？ そういう風なことが 少しずつ何かわかってきた ような気がするんですね。人のお話を、よく聞く、っていうかな、自分がもし痴呆になったら、そんなこと違うとか、それはダメとか言わないで、やさしく何事でも、あっそうか、あっそうやねって言って同調していただくようなつきあい方をしていただいた方が、自分の心が和むし、そういう風に思っております。 | 認知症の方の心や付き合い方がわかるようになった |
| ③ | NHKでね、 バリデーションワーカーという人の話とか聞いたんです よね。その前から私は思っていましたけども、やっぱりその患者さんに対して真心を込めて話し合うとか、その人が言ったことを、もしもあの違っていることでもそれが違うって言わないで、ああそうか、そうかって聞いてあげることがいいとかって。そういうお話を聞いて、ああやっぱり 聞いたことは間違いないなって思いました 。 | いちご会での学習内容と他で聞く内容を比較し、聞いている内容に間違いはないと思った |
| ④ | 歌、歌っていると、もう心がすっきりするね 。何でかね。楽しい歌をね。夕方ちょっと散歩をね、2、30分するんですけど、その時は人がいなかったら歌を歌ったり、手を大きく振ってみたりしてやってるんですよ。やっぱり 歌ってほんとすばらしい と思いますね。 | 歌のすばらしさを再度認識した |
| ⑤ | 私聞くだけが好きなんで、意見は？って言われると、ちょっとしどろもどろになります。何か行っても自分の意見も言われないしダメかなって思ったり。いつも、そう思ってるんです。何か聞かれたらどうしようってそういう気持ちがあるんですよ。 (クラブの代表)代わって、あのなんかあの今日の行ったことって聞かれたらささっと答えられないんや私は。だから何か楽です 。 | クラブの代表としての発言が出きず、代表を交代して楽になった |
| ⑥ | 童謡歌うのは大好きで、すっきりするしね。 童謡が一番いいね。子どもの心になりますしね 。やわらかい心になってね、年いったらやっぱり そういう心がなくならないように 。ね、何事にも感謝していきたい。 | 童謡を歌っているときの子供のような心がなくならないようにしたい |

4. 考察

4. 1 認知症に関する学習を活かす範囲の拡大

認知症は理解するのが難しい病気であるが、少しずつでも繰り返し学ぶことによって、それぞれの立場で次のような変化をもたらすことが出来たと考える。家族員に認知症の方をもつ者は、学習内容と実際の現象が結びつきやすくなり、対応が変化した。入院中の親に対する態度の変化がみられた。後期高齢者である自分が認知症になった場合の対応について考える機会を得た。

このように学習内容が自分や家族など自分の周囲の人たちに影響している。さらには、実際の認知症の人と関わりたいという意欲の向上につながっている。看護学の教育においても、はじめは机上の学習を行うが、机上の学習を終えた後には実際にクライアントとかかわる実習へと発展していくように、ボランティアも学習本や研究者らの解説などを聞き、学んだ内容を実際に認知症高齢者と触れ合うことや、介護現場を見学することで更に学びが深まり、ボランティアとしての実力をつけていくことが出来るだろうと考える。そのよ

うな机上の学習を活かす場をつくっていくことによって、今後は認知症に関する正しい知識や認知症予防の輪がボランティアの知人、友人、地域の人々へと広がっていくことが期待できる。厚生労働省は平成16年12月、「痴呆」から「認知症」へ呼称を改めた。これを機に、平成17年度を「認知症を知る1年」と位置づけ、認知症という病気の知識や、本人の気持ちや状態、望ましい接し方、地域として何ができるのかなどを自分の問題として捉える運動を進めている³⁾。いちご会会員が認知症の正しい知識を地域に広げる役割を担うことができるよう今後も学習を継続し、その内容を検討していく必要がある。

4. 2 ボランティアとしての自覚の芽生え

会の準備、後片付けという小さな事ではあるが、自分たちができることを自分たちで行っていく姿勢がみられるようになった。ボランティア活動の概念について岡本⁴⁾は、活動する側に関わる性格として自発性と主体性を挙げている。今回、ボランティアを育成する場合に、企画する方が準備しすぎる対応に気づかされた。しかし、過度に役割

を与えずると、「クラブの代表者が重荷」「代表を代わって楽になった」等と語っていることから負担感が増大することが予測される。今後は芽生えてきたボランティアとしての自覚を大切にしつつ、過度な役割を与えることなく、いかに自発性や主体性を高めるように対応するかが課題であると考ええる。

4. 3 楽しいこと・興味のあることの力

それぞれがクラブ活動を通して、自分の興味のあること、または新しく何かを始めることができ、クラブ活動が楽しみの場になる、新たな技能の習得、家族内役割の獲得、向上心の芽生えなど自分にとってのプラスの効果を感じている。人はそれぞれ得意なこと不得意なことがあり、やりたいと思うことも違っている。そのため、全員が同じものを楽しむことは難しい。東京都老人総合研究所痴呆介入研究グループのこれまでの知見に基づき、八森⁵⁾は痴呆予防の3原則の1つとして「興味のある楽しいことをする」を挙げており、認知症予防の活動として、モチベーションを持ってもらうために重要なポイントであるといえる。いちご会でのクラブ活動の種類は3つと少ないが、複数のクラブがあり選択できることは重要なことだと考える。今後も会員のニーズに合わせて新たなクラブを作る、クラブ活動の中身を考えるなど工夫し、会員のモチベーションを高めていきたい。

5. まとめ

3人のいちご会会員へインタビューを行って、会員1人1人が様々な立場でいちご会に参加し、成長している過程が明らかとなった。今後も1人1人の持つニーズを把握しつつ、ボランティアの主体的な行動を尊重し、地域社会に役立つ活動を目指していきたい。

1. ボランティア育成の成果

1) 認知症を継続して学習したことによる効果：家族員に認知症の方をもつ人は、学習内容と実際の現象が結びつきやすくなっていた。また、親に対する態度の変化がみられ、自分が認知症になった場合の対応について考える機会となっていた。

2) クラブ活動の効果：個人の楽しみの場、新たな技能の習得、家族内役割の獲得、さらなる向上心などに有効であった。

2. 今後の課題

机上の学習以外の実際に認知症の方とかかわることによる学習、介護者としての介護技術の習得、自分自身の認知症予防など皆それぞれのニーズをもっており、その個別のニーズにどのように対応していくかを考えていく必要がある。その際、意見や役割を強制せずに関わり、ボランティアが自発的かつ主体的に認知症予防の輪を地域に広げていく役割を担えるよう支援していくことが課題である。

謝辞

インタビューに応じていただいたいちご会会員の皆様に感謝いたします。尚、本研究は、石川県立看護大学附属地域ケア総合センターの調査研究助成をうけて実施したものであり、この要旨は第6回日本認知症ケア学会大会で発表した。

引用文献

- 1) 高齢者介護研究会：2015年の高齢者介護～高齢者の尊厳を支えるケアの確立に向けて～, 51-52, 2003.
- 2) Eiko Amatsu, Hiromi Sato, Junko Hosokawa, et al. : Dementia prevention activities in an area Process of training of the volunteer by a local resident, 20th International Conference of Alzheimer's Disease, 237, 2004.
- 3) 池田武俊：介護保険法の改正と今後の認知症対策について、日本認知症ケア学会・第1回教育講演抄録, 4-5, 2005.
- 4) 岡本栄一：ボランティア活動の理念と性格、三浦文夫他編 地域福祉事典. 中央法規, 325, 1997.
- 5) 八森淳：痴呆ケアのための地域ネットワークづくりⅢ. 痴呆症の予防・治療・ケアのための地域ネットワークづくり 青森地域医療研究会の取組み, 日本痴呆ケア学会誌, 216-225, 2003.

(受付：2006年11月10日，受理：2006年12月15日)

Achievements and Problems of Training Local Residents for Volunteer Dementia Prevention Work: Post Training Changes in Volunteers

Junko HOSOKAWA, Eiko AMATSU, Hiromi SATO, Mamiko ITO,
Yuka MATSUDAIRA, Katsuko KANAGAWA, Sigemi FUJITA

Abstract

The purpose of this study was to identify achievements as well as future problems associated with training local residents to be dementia prevention volunteers. Three volunteers served as subjects. Semi-structured interviews were conducted with each subject with a focus on personal changes that they experienced following participation in a dementia prevention volunteers' meeting. The results were as follows: 1) Continued education about dementia had the effect of bringing greater understanding of the relationship between content learned in training and actual care giving; changed attitude toward parents; gave an opportunity to think about oneself as suffering from dementia. 2) Club activities became a place of personal enjoyment; one where new skills were acquired; ones that could lead to a new role to play in one's own family; the activities stimulated a desire for self-improvement. Issues to be addressed in the future included: need for more dementia patient contact-derived learning; acquisition of additional practical care giver skills; enhanced understanding of preventive measures against dementia as a problem for oneself; in interaction with volunteers, staff respect for volunteers' independence and avoidance of imposition of one's own opinions or role.

Keywords dementia, prevention, local inhabitants, volunteer